

俳句

大津俳句会

雲を洩る冬日に一喜一憂し

井芹眞一郎

ゆつくりと足摩る湯や冬至の夜

秋山 恵子

散りつくし銀杏の空の広くなり

市原 初女

川流る土手一面に枯尾花

大塚喜久子

枯芝にそろり小石の混ざり来る

佐賀 久子

入港し展帆^{てんぱん}たたむ冬の風

松尾 昭雅

黄落の日に日に嵩^{かさ}の積まれけり

岡崎 浩子

小春日や山頭火の寺訪ねゆく

森山美穂子

その昔母と仰ぎし冬の星

佐澤 俊子

俳句

つのはな句会

去年今年ペペロンチーノの辛さほど

上杉 波

初空や青い夢追う子らの声

矢嶋 道子

竿の先宇宙遊泳袖を挽ぐ

水野 春子

奥山のシマカンギクに朝の雲

梅木トキエ

逢いたくて手に触れたくて花野風

塚本 洋子

アマテラス幸はう予感初日の出

柴田しのぶ

コロナ禍を破いてまぶしい初日の出

志賀 孝子

初春の一木一草うすみどり

田上 公代

昭和史の末路声無き寒北斗

木庭 杏子

短歌

大津短歌会

父に詫び母に詫びつつ山里の墓^{はかど}へ続く道を急ぎぬ

吉永 恵子

目前^{まへまへ}に低く架かれる虹の橋見慣れし町に夢を描けり

坂本 杲子

山あいの縁^{えにし}の寺の竹灯りあまた点りて人ら集えり

鞍 岳志

今は亡き師の思い出辿りつつ茜に染まる空を眺める

豊岡ミツル

33^{さんじゅうさん}回忌
年新た令和三年今日此の日夫の法事は

管野 静

目の手術すませて公園散歩する銀杏の散るを佇んで見む

小平 善行